
死神のお気に入り

キノコ嫌い

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死神のお気に入り

【Nコード】

N3437Q

【作者名】

キノコ嫌い

【あらすじ】

「『特別部隊』に入隊してもらいたい」その一言から始まった、通称『死神のお気に入り』マクロ・ステインの力オスな日々。人間離れた少女、変態潜入者、天才的ロリコン、怪力女、そして超能力者。一癖もふた癖もあるこの部隊、一体どうなってしまうのやら

……

プロローグ 「雨の中で」 (前書き)

キノコ嫌いともうします。

自分は書き始めるのははやいんですが、途中で投げ出してしまうつことが多いので、

こういったサイトを利用することでなんとか連載させてみようと思っています。

何か感想等ありましたら何なりとどうぞ。

ついでに、縦読み推奨。横でも読めますが。

プロローグ 「雨の中で」

プロローグ

街に、雨が降っていた。大粒の、まさに叩きつけるようなその雨は、大地にはじかれると同時に土を削りながら細かくはじけとび、あたりに薄くもやを作り出している。いつもは人々の交流の場となっているはずの街一番の大通りにも、今日は人影はない。街にはただただ、雨の音だけが響いていた。

「……………」

その土砂降りの中に、少女が一人、佇んでいた。まだ年端もいないであろうその少女は、うつろな瞳をしたまま、小さな体を微動だにせずその金髪の長い髪を雨に濡らしていた。

少女はじつと、前だけを見つめていた。いや、本当はどこも見ていなかったのかもしれない。

なぜなら、彼女の目はどこにも焦点が合っていなかったからだ。まるで、見るという好意そのものを忘れてしまったかのように。

突然、少女は歩き出した。決して、しっかりしている、とはいえない足取りだ。ふらふらとした動きで、彼女は通りを歩いていく。その間も、彼女の瞳が物体を捕らえることはなく、依然として焦点は合わない。無造作にふられた髪の毛先から、水滴がいくつか滴り落ちた。

その時、少女の前方から一人の女が歩いてきた。

「あらあらあら……こんなに雨が降るんだったらお出かけなんてしなければよかったわあ」

どうやらそれは街の住人らしかった。急に雨に降られて慌てて帰宅しようとしているその女は、雨にぬれまいと頭を手で覆い、必死に走っている。

と、その女の視線が少女を捕らえた。

「……うわぁ……」

その瞬間、街人はあからさまな嫌悪を顔に出し、唸った。いやなもの、見ることさえためらわれるような――まるで、汚物を見るような顔つきだった。

女はためらうこともなくすぐに少女をその視線からはずした。もとい、認識さえしないようにしていた。そのまま女は早足でかけていった。その姿は、まるで怪物から逃げ出すようにさえ見えた。

少女はその姿を見るでもなく、やはりふらふらと、その足を動かす。女のことなど、気がついてさえいないようだった。ただひたすらに、おぼつかない足取りで進んでいく。

その姿を、いくつかの家で窓越しに街の人が覗いていた。そして、口々に言う。

「……みてよ、化け物がいる……」

「いやだわ、気色悪い」

「見てるだけで虫唾が走るぜ」

「あんなやつ……消えてしまえばいいのに」

その声は、明らかに少女に聞こえるように話されていた。しかし、それでも少女は全く気にも止めない。

そのときだった。

「くらえ！」

少女の頭を、大きめの石がとらえた。少女の体はその衝撃で大きく左に傾き、そしてあっけなく地面に叩きつけられた。少女の体が泥にまみれる。

「やった！当たった！」

少年の声だろうか、歓喜の声が、脇の家の中から聞こえていたが、「馬鹿！早く窓を閉めなさい！」

母親らしき声と共に、窓が閉められる。しかし、依然として家中からは子供の雄たけびが漏れていた。

「悪者をやっつけた！化け物をやっつけた！」

少女は、細い腕でその体を何とか支えて、ふらりと立ち上がった。

頭からは赤い血がだくどくとあふれ出し、その頬を伝って落ちる。体には泥が大量にこびりついていていた。

それでもなお、少女はまた、歩き出す。その姿は、まるで何かに取り付かれたようだった。

どのくらい経っただろうか。少女は唐突にそのあゆみを止める。

そこは、廃墟だった。元は住居があったのだろうその場所には、瓦礫が大量に積み重なっている。時折、激しい雨に打たれてバランスを崩し、瓦礫のどこかが崩れ落ちていく音が聞こえた。

少女の目が、ついに焦点を捉える。少女の視線、それは瓦礫の中に埋まる、小さなウサギのぬいぐるみに向けられていた。少女は数秒の間それを見つめると、瓦礫に足を踏み入れた。倒壊して折れた木の柱が、少女の細い足に傷をつけた。少女は無視してさらに瓦礫の奥、ウサギぬいぐるみのほうへと歩きつづける。

そして、とうとうぬいぐるみが埋まっているところまでやってきた。少女はウサギの耳の部分をつかむと、力をこめて引っ張った。ぬいぐるみは、あっけないほど簡単に抜けた。雨に打たれ、瓦礫の下敷きになり、その皮は酷く汚れていた。

少女はそのぬいぐるみを抱きかかえた。そのまま、瓦礫の中に座り込む。

そして、少女は目を閉じて、言った。

「お　かあ　さん」

その瞬間、色をなくしていた少女の目には涙が溢れ出していた。こらえきれないのだろう、遂には声を上げて、大声で泣きだす。その声は、雨にかき消されてほとんど響かなかった。

雨が、いつそう激しくなった――

「……………」

彼女が目を開けると、そこには木目の模様をした天井があった。

それは紛れもなく、昨日彼女が寝る前最後に見た光景であった。あたりには、宿屋に備え付けのタンス、クローゼット、そして鏡が置いてあった。

彼女はむくりと起き上がると、数秒の間ボーッとする。と、部屋の隅においてある鏡へとその顔を向ける。そして鏡に映った自分が、年端も行かない少女ではなく、昨日のままの十六歳の姿であることを確認した。

「……夢……」

彼女ーヒノは、朝の日差しが差し込む部屋のなかで、そう呟いた。

プロローグ 「雨の中で」 (後書き)

もし「ほのぼの」というキーワードからこの小説を見つけてよんだ方は、吃驚するでしょうね。どこがほのぼのなんだ。次の話からはちゃんとほのぼのし始めると思います。でも時々シリアスでもありたい、そんな中途半端な小説。

第一話 「特別部隊」(前書き)

第一話

第一話 「特別部隊」

1

その世界には、さまざまな国があつた。それらは互いに一定の距離と保ち、ある程度の干渉をしながら存在していた。よつて世界はおおむね平和であつた。

しかし、時には些細な利害の不一致から、思わぬ争いになることもまゝあつた。そのために多くの国では、「軍隊」と呼ばれる組織を所有していた。

そんな国々の内のひとつ「ランド」の軍隊基地の一角で、彼はデスクの前に立たされていた。

「と、言うわけだ。君には『特別部隊』のメンバーの一員となつてほしいのだ」

「……は、はあ」

日の光が窓から差し込む、ほんのりと明るい部屋のなかで、二十代前半と見える青年―マクロ・ステインは動揺と疑問が半分ずつ混ざつた、微妙な声をだした。

マクロがいる部屋は、二十五畳ほどの大きさがあり、壁にはさまざまな賞状や勲章がかけられている。ほかにも高級な盾や剣などの武具もいくつか備え付けられており、いかにもお偉いさんの部屋、といった感じがする。

そしてマクロの目の前のデスクに座っているのは、まさにその『お偉いさん』であつた。

その「お偉いさん」である、長い黒髪がトレードマークの女性―ティア・グレイは、マクロに言う。

「要領を得ない、といった表情だな」

「えーと、小將。もうすこし説明がほしいのですが」

マクロはとりあえず、正直に答えた。

ついさつき突然に「小将がよんでいる」との報告を受けて、一体何だろうかと考えてはいたが、全く予想だにしていなかったことを言われるとは。

マクロはティアに問う。

「えーと、まず、『特別部隊』とは？」

「あ、ああ、そうか……そこから説明せねばならなかったか。すまんな、他人に説明をするのは苦手分野でな」

苦手っていう問題じゃないような、とマクロは思ったが、口には出さなかった。そんな彼の思考を知ることなく、ティアは言う。

「ひとつ訊くが、わが軍隊――『SAM』に足りないものはなんだろう？」

「われわれに足りないもの、ですか？」

マクロは聞き返した。

『SAM』。それはこの国、「ランド」の国土及び人民を敵国から守るための軍隊の通称である。ランドの国民の安全と生活は、この組織によって保たれているといっても過言ではない。現に現在も、さまざまな敵国がランドと対立している。その攻撃を回避、または防御し、時には攻撃するのがSAMの役割である。

マクロは数秒考えた後、質問に答える。

「……休日？」

「んなわけあるか」

ティアはあきれた顔で言った。「冗談ですよ、とマクロが囁く。

ティアは気を取り直して続けた。

「わが軍に足りないもの……それは『飛びぬけた力』を持つ部隊だ」「飛びぬけた力？」

「そう。わが軍隊は、軍人の数はかなり多いほうだ。しかしながら、決定的な攻撃力がない。だから――」

「そのなかでも飛びぬけた人材を――まとめにして、それを『特別部隊』として決定的戦力にしよう、と」

「その通りだ」

ティアは言いながら頷いた。

確かに、とマクロは思った。ここ最近の軍の任務でも、それはかなり感じられるようになってきている。特に、自国の防衛という観点から見れば、主戦力となる部隊が少ないのはあまり喜ばしいことではない。現在の敵国との状態はそこまで悪くはないのだが、仮に攻められるようなことがあれば、現在の状態のままだと何かと大変だろう。

しかし、マクロにはまだ疑問があった。

「ですが小將。ひとつお聞きしたいのですが……なぜ僕なんですか？」

マクロは率直に聞いた。はっきり言ってマクロは、それほど戦闘力のあるほうの兵士ではない。とても『特別部隊』の一員にはなれそうもないと彼自身は思っていた。

しかし、ティアはこともなげに答えた。

「理由は二つある。ひとつは、いわゆる『一般人』要因としてだ」「い、一般人……？」

マクロは首をかしげる。一体どういうことなのか、皆目検討もつかない。不思議そうな顔をするマクロに、ティアは言う。

「まあ、なんとというか……おもり？みたいな物だな」

「な、なんで『特別部隊』におもりが必要なんですか」

マクロが言うとティアは、はあ、とため息をついた。そしてなんともしえない表情で言う。

「あれだ、あの、実はだな……その『特別部隊』のメンバーなんだが……正直に言って、とても普通、といえるような連中じゃないんだよ……」

「普通じゃない……ですか？それはどんな風にです？」

「そうだな。たとえば……」

そこでティアはいったん言葉を切った。そして、少し思考して言う。

「対人戦でかかってきた相手兵士を全員全治2ヶ月にしたり、暇つ

ぶしに国の機密データにアクセスして間違つてそれを流出させたり、
宿舎の女浴場に潜入したり、歩くだけでいろんなものを壊したり、
空気に向かつて話しかけたりするような奴らだ」

「すいません帰ります」

そういつてマクロはくるりと体の向きを変えると、部屋のドアに
ついているドアノブをまわした。

「ちょ、ちよつと待つてくれ！　お願いだから！　頼むから！」

ティアは脱兎のごとく移動すると、部屋を出て行くこととするマク
ロの腕を必死につかんで引き止める。

しかしマクロは断固拒否する、といった表情だ。

「いやですよ！何でそんな変人達と一緒に仕事しなきゃいけない
んですか！そんなことさせられるくらいなら辞職しますよ！」

「それは全くもって正論だが、君にしか頼める人がいないんだよ！」

「それが本音ですか！　思いつきり厄介事押し付けてるじゃないで
すか！！」

こんな感じで二人の押し問答はしばらく続いたのだった。

「……で、二つ目の理由とは何ですか、小将」

ぶすつとした表情でマクロは言った。押し問答では、マクロはテ
ィアに上司という立場を利用して押し負けたのであった。全くも
つて納得がいかないマクロであったが、上下関係というのは厳しい
ものである。

なんとか押し問答に勝つて安堵の表情を見せるティアは、マクロ
の問いに答える。

「二つ目理由か。……まあこれはまだ理由、ではないな。厳密に言
えばこれによつて、君が特殊部隊に入るかどうか決まる」

「？…どういふことですか？」

マクロは怪訝そうな顔をした。一体どういふことなのだろうか。
ティアは唐突にマクロを見つめた。

「君にも思い当たるふしがあるだろう？マクロ・ステインーいや、

『死神のお気に入り』」

ティアがそういつた瞬間、マクロは驚いた表情をした。どうやらティアの言葉が予想外だったらしい。

マクロはティアに言う。

「……知ってましたんですか」

「ああ。実は先日、君の友人から興味深いを聞いてね。といっても彼は泥酔状態だったのだが」

「……あいつ……」

マクロは半笑いで握りこぶしを作った。体からは怒気がにじみ出ている。あいつ、とはマクロの旧友――ライア・スロープのことだ。SAMの兵士でありマクロの友達でもあるのだが、いかんせん酒に弱く、すぐに秘密を話してしまうのが彼の悪い癖だった。どうやら今回もその癖が出てしまったらしい。

ティアは、今にも部屋を飛び出して馬鹿な悪友を殴りに行きたがるマクロをなだめながら言う。

「彼曰く、『あいつはある特殊能力を持っている。それを使えば、かなりの戦闘力になる』だそうだ。しかし、その能力については話してくれなかった。……というか話す前に酔いつぶれてしまったのだが。まあ、それが君の能力を知っているものの間で『死神のお気に入り』とよばれているということだけは教えてくれた」

「……てことは、どんな能力かは知らないんですね」

「まあそうだな」

マクロはため息をついた。

「つまり、自分が持っているその『特殊能力』がどんなものを判断したうえで、『特別部隊』に配属させるかどうかを決定する、ということですね」

「ああ」

ティアはそういうと、ずずい、と身をデスクに乗り出した。そして言う。

「では話してもらおうか。君の持っている特殊能力とはなんだ？ 念

力か？透視か？それとも弾丸が止まって見えたりするのか？」

ティアは冗談半分らしかった。まあ情報源が情報源だけに、信憑性も低いのだろう。

マクロは悩んだ。ここで本当のことを話すか、否か。しばらく迷った拳句、マクロは決断する。

「……わかりました。正直に言いましょう」

マクロはそういうと、軽く息を吸い込み、言葉を発する。

その説明は、たった一文で終わった。

「自分は、死ぬことができません」

第一話 「特別部隊」(後書き)

次話がちゃんと書けるといいんですが。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3437q/>

死神のお気に入り

2011年1月23日12時40分発行